

初期印刷本の植字法について

—— アウクスブルクのギュンター・ツァイナー工房の例 ——

藤井明彦

0. はじめに

本稿は、2007年にドイツで刊行された拙著 Günther Zainers druckersprachliche Leistung. — Untersuchungen zur Augsburger Druckersprache im 15. Jahrhundert. (Tübingen, Max Niemeyer Verlag) 『ギュンター・ツァイナーの印刷語の成果 —15世紀のアウクスブルクの印刷語の研究』から、初期印刷本の植字法について論じた部分を抜粋し、日本語で新たにまとめ直したものである。上記の拙著は、書記法の変遷を手がかりにして、15世紀中葉という大きなメディア変換期を生き抜いた印刷工房の様子を描き出すことを目的としたものだが、検討を進めて行くなかで当時の植字法についても幾つかの知見を得ることが出来た。⁽¹⁾ 日本語で叙述することにより、より広い範囲の方々から御批判等をいただける機会ができれば幸いである。

1. 分析の対象

ドイツ南部の都市アウクスブルクはドイツ語の初期印刷本出版の中心地であったが、拙著は、同市の最初の印刷業者であるギュンター・ツァイナー (Günther Zainer, †1478) が1471年から1478年のあいだに刊行した18点のドイツ語本の書記法を、印刷本作成時の基本単位であった「折丁」ごとに分析し検討している。まず、それらの刊本の書誌学的情報および内容を簡単にまとめておきたい。

1) 『小祈禱書』 <Gebetbüchlein> 1471年刊。八折判。200葉。折丁：[a^h-B^h]。ミサや聖務日課時の祈り、聖歌などを集めた小型の本。冒頭のカレンダー部分でアウクスブルクの聖ウルリヒ & アフラ教会の祝日が赤字で印されているところから、使用範囲は地域的にかなり限定されていたものと思われる。

2) 『アポロニウス』 <Apollonius> 1471年刊。二折判。32葉。折丁：[a^h-d^h]。古代世界を舞台にした若き王アポロニウスの冒険譚。作者不詳のラテン語の散文物語を人文学者のハインリヒ・シュタインヘーヴェルがドイツ語に訳したもの。

3) 『グリゼルディス』 <Griseldis> 1471年刊。二折判。10葉。折丁：[a^h]。『デカメロン』の最終日最終話。辛抱強い名婦グリゼルディスの物語。ペトラルカによるラテン語への翻案をシュタ

インハーヴェルがドイツ語に訳したもの。

4) 『聖人たちの生涯 (夏の部)』 <Der Heiligen Leben (Sommerteil)> 1472年刊。二折判。211葉。折丁：[a¹⁶ b⁸ c³ d¹² e¹ f¹¹ g¹¹ h¹¹ i¹ k¹ l¹ s¹¹ t¹¹ v¹¹ x¹ y¹¹ z¹¹ A¹¹]。『黄金伝説』のドイツ語版。200点前後の手写本と40点以上の印刷本が確認されているが、ツァイナー版が初めての印刷版。この「夏の部」には聖アンブロジーノ（4月4日）から聖ヴェンデル（9月28日）までが収められている。

5) 『ベリアル裁判』 <Belial> 1472年6月26日刊。二折判。90葉。折丁：[a¹⁶-i¹⁶]。教会法学者テラモのヤコブスのラテン語著作のドイツ語訳。イエス・キリストによる人類の救済は違法だと訴え出た悪魔の一団とイエス側が法定で争う話。

6) 『黄金遊戯』 <Das goldene Spiel> 1472年8月1日刊。二折判。48葉。折丁：[a¹⁶-d¹⁶ e⁸]。シュトラースブルクの司祭インゴルト師の説教集。遊戯・ゲームを美德と悪徳が争う場に見立てる。

7) 『婚姻の書』 <Ehebüchlein> 1472/73年頃刊。二折判。61葉。折丁：[a¹⁶-e¹⁶ f¹¹]。ニュルンベルクの人文主義者アルブレヒト・フォン・アイプの著作。初版は地元ニュルンベルクのアントン・コーベルガー工房が刊行。古人の言や事例を引きつつ婚姻に関するさまざまな問題点を挙げながらも、最後は結婚を勧めるという内容。

8) 『プレナリウム (ミサ全書)』 <Plenarium> 1474年刊。二折判。342葉。折丁：[a¹⁶ b¹¹ o¹⁶ p⁸ q⁸ r¹⁶-L¹⁶ M¹]。元来はミサや聖務日課時に朗読されたり、あるいは説教の基礎とされる聖書の章句を集めた聖職者用の書だったが、それに注解を付したタイプのもものが登場し、信心書として広く一般にも読まれるようになった。

9) 『ドイツ語聖書』 <Deutsche Bibel> 1475/76年頃刊。二折判。534葉。折丁：[a¹⁶ b⁸ c³ d¹²-s¹⁶ t¹⁶ und 1 Karton v¹⁶-z¹⁶ A¹⁶-S¹ T⁸ V⁸ X¹⁶-Z¹⁶ aa¹⁶-hh¹⁶]。15世紀に刊行された印刷本のなかで最も巨大なものの一つ。1466年にシュトラースブルクのヨーハン・メンテリン工房が刊行した最初の印刷版ドイツ語訳聖書を大幅に修正・改訂したもの。

10) 『人間生活の鑑』 <Spiegel menschlichen Lebens> 1475/76年頃刊。二折判。174葉。折丁：[a¹⁶-k¹⁶ l¹⁶ m¹⁶-q¹⁶ r¹⁶ s¹⁶]。サモラ司教ロドリゲスの、さまざまな階層や職業の人々（俗界は皇帝から羊飼いで、聖界は教皇から寺男まで）の暮らしを描いたラテン語原著をシュタインハーヴェルが独訳したもの。

11) 『シュヴァーベン法鑑』 <Schwabenspiegel> 1475/76年頃刊。二折判。164葉。折丁：[A¹⁶; a¹⁶-k¹⁶ l¹⁶ m¹⁶ n¹⁶ o¹⁶ p¹⁶ q¹⁶]。『ザクセン法鑑』は南部ドイツ地域でも手を加えられて受容されていたが、『シュヴァーベン法鑑』はその改訂作業の最終版。冒頭に項目別の詳細な目次が置かれている。

12) 『ドイツ語聖書』 <Deutsche Bibel> 1477年刊。二折判。上巻 321葉、折丁：[a¹⁶ b¹⁶ c¹⁶ d¹⁶-z¹⁶ A¹⁶-I¹⁶]; 下巻 332葉、折丁：[a¹⁶-z¹⁶ A¹⁶-I¹⁶ K¹⁶ L¹⁶]。先に刊行した聖書を2巻に分けて、大きさ

もやや小型にしたもの。

13) 『チェス盤の書』 <Schachzabelbuch> 1477年刊。二折判。40葉。折丁：[a¹⁰-d¹⁰]。イタリアのドミニコ会士チェッソールのヤコブスのラテン語原典のドイツ語訳。チェス盤をこの世に、チェスゲームを人生になぞらえて、それぞれのチェス駒（=階層および身分）の処世法を説く。

14) 『聖墳墓への道』 <Weg zum heiligen Grab> 1477年刊。四折判。116葉。折丁：[a¹⁰-c¹⁰ d¹⁰-n⁸ o⁸]。南西ドイツの小都ズートハイムの牧師ルードルフが14世紀半ばに著したラテン語の旅行記の独訳。近東各地の地勢や風物について述べているが、エルサレムの聖墳墓を含めて、既存の旅行見聞記の記述を転用していることが多い。

15) 『バルラームとヨザファット』 <Barlaam und Josaphat> 1475~1478年の時期に刊行。二折判。98葉。折丁：[a¹⁰-i¹⁰ k¹⁰]。インドの王子ヨザファットが父王に迫害されていたキリスト教徒の隠者バルラームと出合い、改宗する物語。

16) 『罪人の鑑』 <Spiegel des Sünders> 1475~1478年の時期に刊行。四折判。126葉。折丁：[a⁸-b⁸-p⁸ q⁸]。14世紀末から数多く編纂された「告解心得書」の一つ。主に「七つの大罪」と「十戒」を説きながら自省をさせ告解を促す。

17) 『イソップ（生涯と寓話）』 <Esopus> 1477/78年頃刊。二折判。167葉。折丁：[a¹⁰ b¹⁰ c⁸ d⁸ e¹⁰-q¹⁰ r⁷ s⁸]。初版はウルムのヨーハン・ツァイナー（ギュンターの兄弟）の工房からで、ラテン語とドイツ語の対訳仕様であったが、その後間もなくギュンターの工房から出たドイツ語版が、後の数多くの版の原型になった。15世紀に最も成功をおさめた書物の一つ。

18) 『医学の書』 <Arzneibuch> 1477/78年頃刊。二折判。104葉。折丁：[*¹ a¹⁰-k¹⁰]。バイエルン生まれの医師オルトルフが13世紀の末に、ラテン語の医学書で得た知識を同僚の医師たちに体系的に伝えるために編んだ本だが、広く一般にも浸透して行った。

2. 植字工の分業について

以上の18点の印刷本を分析した結果、殆どすべての刊本内で植字工の交替が起こっており、またその交代が主に折丁と折丁の間で生じていることが確認された。また各折丁からは原則として最初の2頁と最後の1頁を抜粋したので、同一折丁内での書法の揺れも幾つかのケースで発見することができた。

上記18点のなかで、植字工交替の痕跡を残していないのは1) 『小祈禱書』、3) 『グリゼルディス』、11) 『シュヴァーベン法鑑』、13) 『チェス盤の書』の4点である。非常に規模の小さい刊本である『グリゼルディス』（10葉、折丁数1）では植字中に担当者が交替したことは想像し難いが、『チェス盤の書』も全40葉（折丁数4）と比較的小規模であり、1名の植字工が担当できる仕事量であろう。その一方で『小祈禱書』は小型の八折判（8）ながら200葉を擁するボリュームがあり、植字作業も分業して行われたことを推測させるが、1ページの平均単語数は57語と少

9) 『ドイツ語聖書』

a	b	c	d	e	f	g	h	i	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	v	x	y
z	A	B	C	D	E	F	G	H	I	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	V	X
Y	Z	aa	bb	cc	dd	ee	ff	gg	hh												

10) 『人間生活の鑑』

a	b	c	d	e	f	g	h	i	k	l	m	n	o	p	q	r	s
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

12) 『ドイツ語聖書』

a	b	c	d	e	f	g	h	i	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	v	x	y
z	A	B	C	D	E	F	G	H	I	a	b	c	d	e	f	g	h	i	k	l	m
n	o	p	q	r	s	t	v	x	y	z	A	B	C	D	E	F	G	H	I	K	L

14) 『聖墳墓への道』

a	b	c	d	e	f	g	h	i	k	l	m	n	o
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

15) 『バルラームとヨザファット』

a	b	c	d	e	f	g	h	i	k
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

16) 『罪人の鑑』

a	b	c	d	e	f	g	h	i	k	l	m	n	o	p	q
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

17) 『イソップ』⁽⁶⁾

a	b	c	d	e	f	g	h	i	k	l	m	n	o	p	q	r ^a	r ^b	s ^a	s ^b
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----------------	----------------	----------------	----------------

18) 『医学の書』

*	a	b	c	d	e	f	g	h	i	k
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

上記のような所見から、ツァイナー工場の植字作業の分業に関しては次のような3つの原則を確認することができる。

- 1) 植字工は基本的に折丁単位で仕事をし、折丁単位で交替する。
- 2) 1点の印刷本には大抵の場合2名の植字工が関与している。
- 3) 植字工は基本的に並行して(同時に)ではなく、交替して(相前後して)作業を進めている。

以下、それぞれの点について詳述および補足する。

1) 折丁の途中で植字工が交替することは、『聖墳墓への道』や『罪人の鑑』といった四折判(4)でも起こっていない。折丁内での交替が確認できるのは、工房の最終期の刊本である『イソップ』と『医学の書』の一定の部分においてのみだが、その特殊な分業方法については後段で詳しく論じる。ただし例えば『グリゼルディス』におけるように、交替ではないものの、同一人の植字工がある折丁内で作業を進めていくうちに書記法に揺れ生じて不規則になることがある。この現象は特に作業が終わりに近づく段階で現れることが多い。

2) 『ドイツ語聖書』(1475/76年頃)や『人間生活の鑑』には3名の植字工が関わっていた可能性もあるが、ほとんど全ての場合において2名の植字工が作業を分担していた。その2名はほぼ同じ量の仕事をこなすこともあれば、『ベリアル裁判』、『バルラムとヨザファット』、『医学の書』におけるようにどちらかが補助的な役割を演じることもある。その一方で『ドイツ語聖書』のような大部の印刷本の植字がわずか2名ないし3名によって完遂されたとするのにはやはり無理が伴う。³⁷ 言語学的な分析結果に従えば折丁は明らかに2つないし3つのグループに分けられるが、そのなかでの従事者数は場合によっては1名ではなく、複数人数から成るチームが植字担当と校正担当のように役割を分担しながら作業にあたっていた可能性もある。

3) 1冊の本の植字を担当する2名(ないし3名)の植字工は、仕事を並行して同時に進めることはまずなく、一方が担当分を終えてから、もう一方の植字工が作業につくという手順を繰り返していたと思われる。ツァイナー工房の刊本の場合、それまで手写本で流布していたテキストに初めて印刷本の形態を与えるといったケースが殆どであり、並行して植字作業を進めるために必要なテキストの前もっての振り分けは、既存の印刷本の再版の場合に比べてかなり難しかっただろう。前もってテキストを振り分ける際に見積もりを誤って担当分の最後に何も植字・印刷されていない頁が生じてしまうようなことが当時はしばしばあったが、ツァイナーの刊本の場合そういった現象は一次に言及する1例を除いて殆ど見あたらない。

検討したツァイナーの刊本で唯一、同時並行的な分業の可能性を否定できないのが4)『聖人たちの生涯(夏の部)』である。全部で127人の聖人たちの生涯を物語るこのテキストでは、折丁 a~m の植字工が63の(聖アンブロジオから聖マルタまで)、折丁 n~A の植字工が64の聖人伝(聖パンタレオンから聖ヴェンデルまで)を担当している。この書物のこういった構成は、テキストの前もっての振り分けが比較的容易であったことを想像させる。

この刊本は24の折丁から成っているが、隣り合った2つの折丁はペアを形成しており、全体として12の折丁ペアから成り立っていると言える($a^r b^s/c^t d^{s-1}/e^r f^{s-1}/g^{16} h^{s-1}/i^{20} k^6/l^{16} m^8/n^{16} o^r/p^{16} q^8/r^{16} s^8/t^{20} v^{s-1}/x^{16} y^{s-1}/z^1 A^{27}$)。それぞれのペアの最初の折丁(a, c, e...)はよく見られる10葉20頁の折丁で、冒頭にはそこから始まる新しい聖人伝の見出し(例えば Von sant Regina 『聖レギーナについて』)とその聖人を描いた木版画(大抵は異教徒に迫害されている図柄)が置かれている。各ペアの2番目の折丁(b, d, f...)は紙葉の数が不規則なところから推すと、与え

られた量のテキストをうまく折丁内に収めるように調整する役割を持っていたのだろう。しかし、植字されるテキスト量と受け皿となる紙葉量がうまく一致しなかった場合は、最後の頁の最後のコラムに— ツァイナー工房の大型本がしばしばそうであるように、この刊本も1頁が2つのコラム（縦欄）に分かれている— 何も植字・印刷されていない空白部分が生じることになる。例えば b8^{vs} で10行、d9^{vs} で5行、k6^{vs} で7行、m8^{vs} で16行、s8^{vs} で12行、v9^{vs} で5行、y7^{vs} で1行。すなわち一方の植字工の担当部分の最後（m8^{vs}）に最も多くの空白（16行）が生じている。次の頁の冒頭（n1^{rs}）には聖パンタレオンを描いた木版画と見出しが置かれているが、それが占めているスペースは15行であり、前の頁に収容することが可能だ。この印刷本では前の頁の最後に木版画と見出しがあり、次の頁から聖人伝のテキストが始まるといったケースがかなり多くあることを勘案すれば、⁽⁸⁾ この印刷本の植字が並行作業で行われた可能性を完全に否定することはできない。⁽⁹⁾

3. 「全紙単位の植字」の導入

『イソップ』の折丁 r と s においては、折丁内部で植字工の交替が起こっている。⁽¹⁰⁾ 折丁 r は全7葉14頁、s は全6葉12頁であるが、そのうち r4^v と r5^r、s2^r と s5^r の書記法および文章記号の使用法は、その折丁内の他の部分と明らかに異なっている。同様のことは『医学の書』（[*^a10-k¹⁰']）の折丁*ghi においても生じていて、以下の箇所がそれぞれの折丁の他の部分と異なる書法を示している（*2^v、g4^v g5^v-6^r g7^r、h4^r-7^v、i2^r i9^v）。⁽¹¹⁾ そしてこれらの頁はすべて—『医学の書』の*2^vを除いて—それぞれ同じ1枚の全紙（Bogen）上に位置している。

『医学の書』の折丁 ghi のように5枚の全紙（すなわち10葉で20頁）から成る折丁では、1枚の全紙上で以下のような2つの頁がそれぞれ隣り合わせになる。

全紙 I ^r :	1 ^r + 10 ^r ,
I ^v :	1 ^v + 10 ^v ,
II ^r :	2 ^r + 9 ^r ,
II ^v :	2 ^v + 9 ^v ,
III ^r :	3 ^r + 8 ^r ,
III ^v :	3 ^v + 8 ^v ,
IV ^r :	4 ^r + 7 ^r ,
IV ^v :	4 ^v + 7 ^v ,
V ^r :	5 ^r + 6 ^r ,
V ^v :	5 ^v + 6 ^v .

『イソップ』の折丁 r は7葉から成る変則的な構成の折丁で、二つ折りにした3枚の全紙の外側に全紙の半分大の紙（半紙）が付加されていて、それが第1葉（r1）となる。r2, r3, r4が折

丁を束ねている糸の縫目の前、r5, r6, r7がその縫目以降、すなわち r4' と r5' は最も内部の全紙の内側で隣り合った頁となる。¹² 6葉、すなわち3枚の全紙からなる折丁 s では、s2' と s5' は第2全紙の内側で隣同士になっている。

このことは、当時の最新の作業法である「全紙単位の植字 (Satz in Formen)」がツァイナー工房でも実践されていた可能性を示唆している。ライン地方の初期印刷本に詳しい Severin Corsten によれば、ケルンのハインリヒ・クヴェンテル (Heinrich Quentel) 工房では1480年頃でもこの方法はまだ導入されていなかったという。¹³ その一方で、ウルムのヨーハン・ツァイナー (Johann Zainer, ギュンター・ツァイナーの兄弟) が1476年頃に刊行した『デカメロン』<Decameron>を精査した Joachim Theisen は、1頁の行数の揺れやヘッダーの文言の差異から、それが全紙単位で植字され、更に部分的には全紙単位で印刷されたものと推測している。¹⁴ 両工房の地理的近さも考え合わせると、この方法はほぼ同じ時期にアウクスブルクの兄弟工房にも知られていたと考える方が自然だろう。

この植字法を実践する場合、それぞれの頁に対するテキストの割り付けは格段に面倒になるが、印刷の全工程は大いにスピードアップする。それまで1枚の全紙は4度湿らされ (インクの定着を良くするため)、4度印刷プレス機に入れられ、そして4度一洗濯物を干すように一紐にかけられて乾かされていたが、それがすべて半分の2回で済む。初期印刷本は1480年代になるとそれまでの中世の手写本文化の踏襲から脱却し、近代的な大量生産品へと本格的に脱皮して行くわけだが、この1470年代の終わり近くも既に生産を合理化する試みが始まっていたということになる。

では『イソップ』と『医学の書』では刊本全体にわたって全紙単位の植字が行われたのだろうか？

この新しい植字法は、もちろん1冊の本全体に適用された時にその合理化のポテンシャルを最大限に発揮するものだろう。しかし両印刷本において目につくのは、全紙単位で仕事をする植字工が登場するのが、本の最後近くになってからということだ。『イソップ』では全18折丁のうち第17折丁 (r) と第18折丁 (s)、『医学の書』 (全11折丁) でも主に第8~10折丁 (g-i) においてである。しかし、書記法や文章記号の使用法において植字工交替の痕跡を残していない他の折丁、すなわち a-f と最後の k も全紙単位で植字された可能性を排除することはできない。つまり一人の同じ植字工が作業を全紙単位で行った場合、あるいは分業をしたにせよ作業後に校正が行われた場合だ。全紙単位植字では、通例折丁の最も内側の紙葉 (10葉から成る場合なら 5' と 6') が最後に植字されるために、テキスト量の見積もりが実際と異なった場合、その最も内側の部分で行数を加減して調整することが多いと言われている。¹⁵ 『イソップ』では全167葉に208点もの木版画が挿入されており、それが各頁のレイアウトを大きく決定しているため、印刷行数の比較はあまり意味があるとは言えない。一方『医学の書』 (木版画なし) の各頁はヘッダーを含めて通

例36行である。以下に、各頁の印刷行数を比較した結果を挙げる。「+1」、「-1」等は標準的な36行からの逸脱を示している。

- *: 1^r (+1), 2^r (+1), 3^r (+1), 4^r (+1);
- f: 7^r (-3);
- g: 5^r (-1), 6^r (-1), 7^r (-1);
- h: 2^r (+1), 4^r (-1), 5^r (-2), 5^r (-2), 6^r (-2), 6^r (-2), 7^r (-2);
- i: 4^r (-2), 9^r (-1);
- k: 1^r (-2), 2^r (-3), 4^r (-1), 4^r (-2), 5^r (-1), 5^r (-1), 6^r (-1), 6^r (-1), 7^r (-1),
8^r (-3), 9^r (-3), 10^r (-4).

ここに挙げられていない頁はすべて36行で構成されており、結局、不規則な行数を示しているのは最初の折丁(*)と後半ないし最後近くの折丁(f g h i k)だけということになる。最初の折丁の内容は目次であり、それぞれの見出しに該当する頁数が細かく挙げてあるところを見ると、本文の植字がすべて終わった後で作成された可能性が高い。したがって、全紙単位の植字法はこの印刷本作成の最後近くになって多かれ少なかれ唐突に導入されたものということになる。

その一方で、この2点の印刷本以前に「全紙単位植字」が行われた可能性はあるだろうか？これまでの分析の際には、各折丁から原則として最初の2頁と最後の1頁を抜粋してきており（二折判の10葉の折丁なら1^r 1^v 10^v）、全紙単位植字の場合に最後に植字される部分、すなわち折丁の中心部は基本的に顧慮していない。しかしそこに何らかの不規則性が見られる場合は、全紙単位の植字が既に行われていた可能性がある。以下、『イソップ』以前の印刷本を遡る形で検証して行きたい。

16) 『罪人の鑑』では分析の際に幾つかの言語現象（動詞 gehen と stehen の現在形の幹母音、動詞 haben の短縮形 hon の有無など）に関してすべての頁を調査対象にした。その結果、折丁内での不規則性は — その中心部においても — 見当たらなかった。

15) 『バルラームとヨザファット』と13) 『チェス盤の書』に関しては、新たにそれぞれの折丁の中央部分を抜粋して分析を行ったが、⁽¹⁶⁾ 特に不規則性は発見されなかった。

14) 『聖墳墓への道』は大部の二折判(2^r)が主流のツァイナー工房には珍しい四折判(4^r)で、折丁内でそれまでとは別様の分業が行われた可能性があった。そこで、全体を分析する前に最初の折丁(a)と最初の8葉折丁(d) — それまでの折丁 a b c は10葉折丁 — の全体をまず調査した。その結果ここでも折丁内部に不規則性が見られることはなかった。

12) 『ドイツ語聖書』においても追加の分析を行ったが、66もある折丁すべての調査は困難だったので、5つの分業ブロック(a-f, g-s, t-F, G-v, x-L [本論上記5頁参照])のそれぞれ最後の折丁の中央部分を抜粋した。⁽¹⁷⁾ 新たに抽出した部分はここでも、既に抜粋・分析されていた折丁

の最初と最後の部分と異なる言語的様相を示すことはなかった。最後に念のため全66折丁の中心部の4つのコラム（1頁は2つのコラム〔縦欄〕から成っている）の行数の調査を行った。通常のコラムは51行。抜粋した4×66=264のコラムのうち行数が異なるのはわずか29のコラムであり、その行数差も49行が1例のみで、他は1行差の50行か52行であった。^{14*}

これ以上遡る必要はないだろう。この新しい植字法は『イソップ』と『医学の書』で、すなわちツァイナー工房の最終期になって初めて実行に移されたものに違いない。1478年4月のツァイナーの死の直前にその工房が破産をしたという事実を考え合わせると、この植字法は印刷本の制作過程を効率化するために多かれ少なかれ必要に迫られて導入されたものと思われる。この経済性を優先する傾向は、売れ筋の小型本（『聖墳墓への道』、『罪人の鑑』）や多数の木版画を搭載した人気本（『イソップ』）の刊行を手がけるというテキスト選択とならんで書記法にも現れており、『医学の書』ではそれまで重視してきた書記法の体系性を犠牲にして、主要販売地域（バイエルン方言地域）の流儀に合わせるような書法を突然取り入れたりする。しかしこういった様々な経営的手立ても及ばず、声望の高かった印刷工房と工房主はその活動に終止符を打つことになったのだ。

注

- (1) John L. Flood 氏による書評 (The Library 2007 8(3): p.340-342), Helmut Graser 氏による書評 (IASOnline [03.12.2009]) も参照されたい。
- (2) 『小析禱書』は1頁平均57語×394頁=22,458語、『チェス盤の書』は1頁平均261語×79頁=20,619語。なお1頁の平均語数は最初の数頁（3頁～5頁程度）の語数を平均して算出してある。
- (3) Künast, Hans-Jörg: Dokumentation: Augsburger Buchdrucker und Verleger. In: Augsburger Buchdruck und Verlagswesen. Von den Anfängen bis zur Gegenwart. Hrsg. v. Helmut Gier und Johannes Janota im Auftrag der Stadt Augsburg. Wiesbaden 1997. S.1205-1340. 1206頁参照。
- (4) 『シュヴァーベン法鑑』は1頁平均297語×323頁=95,931語。
- (5) 拙著, 78頁参照。
- (6) $r^1 = r4^1$, $r5^1$; $s^1 = s2^1$, $s5^1$. 本論123頁以下参照。
- (7) 新井皓士氏も書評でこの点を指摘されている（『ドイツ文学』136号 [2008], 199-200頁）。
- (8) 例えば $d8^{1a}$, $e6^{1a}$, $e8^{1a}$, $e9^{1a}$, $f5^{1a}$, $f8^{1a}$, $g2^{1a}$, $h6^{1a}$, $n2^{1a}$, $n5^{1a}$, $n5^{1b}$, $n8^{1a}$, $n10^{1a}$, $q6^{1a}$, $v3^{1a}$, $z3^{1a}$, $z10^{1a}$, $A1^{1a}$ 。
- (9) 『婚姻の書』でも、一方の植字工が折丁 a b c, 他方が d e f を担当するという分業の仕方を見ると、並行して植字が行われた可能性があるが、折丁 c と d は一つの文章の途中で切り替わっている: *als die heiligen martrrer cristfi habent gethan in den selbigen ift* (折丁 c が終わり, 折丁 d が始まる) *gewesen grosse gedult vnd weißheyte*. おそらく折丁 c を最後まで植字したところで、植字工が交替したのだろう。
- (10) 拙著, 100頁以下参照。
- (11) 拙著, 107頁以下参照。
- (12) München SB 2° Inc. s. a. 9参照。
- (13) Corsten, Severin: Das Setzen beim Druck in Formen. In: Gutenberg-Jahrbuch 58 (1984), S.128-132. 132頁参照。

- (14) Theisen, Joachim: Arigos Decameron. Übersetzungsstrategie und poetologisches Konzept. Tübingen/Basel 1996. 99頁参照。
- (15) Haebler, Konrad: Handbuch der Inkunabelkunde. Leipzig 1925. 77頁; Corsten (註13), 129頁参照。
- (16) 『ハバルラームとヨザファット』: a $\bar{5}$ -6 \bar{r} , b $\bar{5}$ -6 \bar{r} , c $\bar{5}$ -6 \bar{r} , d $\bar{5}$ -6 \bar{r} , e $\bar{5}$ -6 \bar{r} , g $\bar{5}$ -6 \bar{r} , h $\bar{5}$ -6 \bar{r} , i $\bar{5}$ -6 \bar{r} 。『チェス盤の書』: a $\bar{5}$ -6 \bar{r} , b $\bar{5}$ -6 \bar{r} , c $\bar{5}$ -6 \bar{r} , d $\bar{5}$ -6 \bar{r} 。
- (17) 『ドイツ語聖書』(1477年): f $\bar{5}$ -6 \bar{r} , s $\bar{5}$ -6 \bar{r} , F $\bar{5}$ -6 \bar{r} (Teil 1); v $\bar{5}$ -6 \bar{r} , L3 \bar{v} -4 \bar{r} (Teil 2)。
- (18) 52行: h6 rab (Teil 1); c $\bar{5}$ vaid 6 ra , v $\bar{5}$ vib (Teil 2)。50行: o6 rb , p6 rab , y6 vib , A6 vab , I6 vab (Teil 1); b6 ra , o6 ra , s $\bar{5}$ vab 6 ra , t6 rab , x6 ra , y6 ra , I6 vib (Teil 2)。49行: s6 ra (Teil 2)。